書　評・紹　介

森永　卓郎著

『<非婚>のすすめ』

講談社，1997年刊，pp.181.

本書は4章からなり，現在進行中の未婚化（本書の著者によれば<非婚>化）の流れの中で，積極的シングルライフへのライフスタイルの変化とその積極的推進をめざす書である．

第1章「第二の家族革命」は，戦後における夫婦に子ども2人の「核家族」が標準という家族のあり方が，経済的要請に基づいて政策的に持ち込まれた一時的形態に過ぎないことを述べる．第1に，日本の家族は政策的コントロールをずっと受けてきたとし，その具体的手段は，①経済的優遇策，②婚姻や出産行動の法律的・行政的規制による直接コントロール，③メディアなどによる思想・マインドコントロールであるという．それらの家族コントロールは，戦時に産めよ殖やせよという戦時人口政策の多産誘導から始まり，戦後の人口過剰キャンペーンの中での中絶手段による少子化の誘導（これを著者は「第一の家族革命」と呼ぶ），1970年代後半以降の<非婚>化による出生率低下である．とくに，<非婚>化による最後の変化を，本書の著者は，終身結婚制の終焉による「第二の家族革命」と位置づけている．

第2章「日本型恋愛と結婚の謎」は本書の中心的部分であり，そこでは「第一の家族革命」から「第二の家族革命」にいたる間の日本家族の基本理念は，恋愛と結婚とセックスの三位一体主義＝ロマンチック・ラブ・イデオロギーであったといい，三位一体主義の具体的中身とその変化を述べている．まず，「第二の家族革命」以来「三位一体主義」が次第に崩壊し，著者によれば，以下の4つの変化が現れてきたという．すなわち，①恋愛のために結婚が必要だという規範はくずれ，若いうちの恋愛では，恋愛と結婚は切り離してよいと答える人が半数を超えるにいたった（1993年東京都調査）．②恋愛にセックスが必要という規範もくずれつつあり，セックスと関係ないミツグ君・アッシー君の登場や名前も住所も知れぬイベント・コンパニオン嬢に対して恋愛感情を持つオタク達の出現をみるにいたった．③セックスの前提として結婚を条件にする規範もくずれつつあり，調査によれば，婚前交渉の是認意見や不倫経験の割合は上昇している．④セックスと結びつかない結婚は無いという観念もくずれつつあり，セックスレス夫婦が急増しつつある．

しかし，ロマンチック・ラブ・イデオロギーのうちで，現在も強固に残っている関係もあり，その①は「恋愛は結婚の必要条件」という規範であり，「全く恋愛のない結婚をしてもかまいませんか」ときくとほとんどがＮＯと答える．第②に「セックスには恋愛が必要だ」という規範も，まったく揺らぎをみせていないという．

ここで著者は，森岡清美・望月嵩によって提示された愛の三要素（性愛，相互依存，相互理解）に言及し，森岡・望月説では夫婦愛において3要素がそれぞれ不可分にバランスのとれたものとされていたのに対し，現代の愛の行動においては3要素のパッケージではなく，それぞれが単独で成立し得るとする．言い換えれば，著者は，性愛には性愛のベスト・パートナーがあり，相互理解には相互理解のベスト・パートナーがいて，両者は同一の人であるとは限らない．したがって，人々が最適な行動をとるなら，3要素の人につきそれぞれ別の人を選択し，相互依存関係最適の人とはずっと相手を変えず継続し，相互理解関係最適と性愛関係最適の人についてはその時々に相手を次々に替えるか，

複数の相手と同時に付き合うことによって，より快適になるのだという．そして，相互理解と性愛について複数の相手を選ぶにあたって，現在日本の様々な状況から，結婚・離婚の繰り返しおよび婚姻中の不倫という手段には困難があり，シングルの選択が望ましいという．

このように，著者によれば，終身結婚制の終焉は明白なのに現実に従来型の恋愛・結婚システムが全面崩壊しないのは，結婚相手に関するオンリーユー・フォーエバー症候群が広がっているからであり，そこにはオンリーユー・フォーエバー観念に関する戦後のアメリカン・ライフスタイルの神話と流行歌にみられるマインド・コントロールおよび企業と官僚による終身雇用・終身結婚制の誘導があったという．

第3章「シングルライフの経済学」では，現代の税制，年金，子育てコストなどの検討から，通念と異なり，シングルあるいは共稼ぎ世帯の方が経済的に有利であることを説く．さらに，現代日本における結婚や住宅，子育て・教育コストの高さなどから<非婚>すなわちシングルライフの選択を勧める．

第4章「非婚社会で何が起こるか」では，ライフスタイルの多様化や所得格差の拡大，年金その他の拠出・支払いと受領・回収面での男女の損得格差の拡大とともに，男女交際面では特定のモテる男性の「ひとり勝ち」状況などが述べられる．

本書は，家族に関する従来の様々な通念を打ち壊しているという意味で，大変興味深い．しかし，その要点は，婚姻関係に関わらぬ複数相手との性愛の自由化を主張していることに集約できる．現代の未婚化過程において，性愛自由化の動向を無視し得ないことは確かにその通りなのかも知れない．しかし，私としては，著者の主張に対していくつかの疑問がある．第一に，一般に人の異性への関心において，性愛と相互理解と相互依存の関係を相手ごとに容易に使い分けるほど器用なものであろうか．人が異性に対し関心を抱くとき，程度の差はあれ実際には，単に性愛・セックスだけというよりもっと全人格的・全方向的な関心に基づくのではないか．もし，異性への関心がセックスだけ，あるいは特定の目的達成だけである場合には，その関係は安定した情緒的な関係とは必ずしもならないのではないだろうか．そして，安定した情緒的なものでないとしたら，その男女関係は，事務的・業務的な目的処理だけのもの，あるいは売春とも見まがうギブ・アンド・テイクの関係になってしまわないかと思う．もっとも，こうした思考自体が，著者に言わせれば，特定の結婚相手を想定した従来型の思考なのかもしれないが…．第二に，仮に人は異性とのセックスに対してもそのように器用に対処し得るとしても，著者も指摘するように，複数の異性と目的別あるいは同じ目的で競合的に同時に付き合うことが可能なのは，結局，一部のモテる人たちに限られざるを得ない（とくに異性とのセックスに関しては）．私には，そうした異性相手に対する社会的アンバランスが無理なく長期にわたり継続し得るとは思われない．一時的にはともかく，多くの人は生涯にわたるミッグ君・アッシー君ではいられないだろうし，相手もいず報われもしない大多数が不満を持たないですむであろうか．第三に，百歩ゆずって著者のいう性愛自由化・<非婚>社会が実現するとして，そこではもはや従来型の「家族」も存続し得なくなるのだが，そうした社会の将来を単にライフスタイルの多様化と呼ぶ程度ですむのかどうかは疑問である．

（渡邉吉利）